

近代日本の温州蜜柑産地形成における 苗木産地の寄与

——兵庫県川邊郡稲野村の「池田苗」に注目して——

豊田 紘子

I はじめに

現代日本において広く食されている温州蜜柑は、品種そのものは江戸時代に存在したものの、本格的な栽培が開始されたのは明治期以降といわれている。江戸後期から明治期にかけて、柑橘産地の和歌山県や静岡県では温州蜜柑苗を栽植し始め、またそれまで柑橘類をほとんど栽培していなかった広島県や愛媛県などの地域が新たに温州蜜柑を中心とする柑橘生産を開始し⁽¹⁾、日本の各地に温州蜜柑産地が形成された。日本における果樹・蔬菜の栽培史においては、明治期には政府の勸農政策のもと西洋品種が導入され、輸入した種子や苗木を試験場で試植・繁殖し、その種苗が日本各地に配布されることにより果樹・蔬菜産地が形成されたという説明がなされている⁽²⁾。現代日本で食されている果樹・蔬菜の多くは明治期に導入された西洋品種が起源であるため、その産地形成パターンにあてはまる例が多いものの、江戸時代にすでに存在していた日本在来の品種である温州蜜柑についてはその説明があてはまらない。

江戸時代において「みかん」は商品化され人々に広く食されていたが、それは温州蜜柑とは別品種で種のある紀州蜜柑であった。品種そのものは存在したにも関わらず、江戸時代に温州蜜柑生産が活発にならず、また人々が温州蜜柑以外の品種の蜜柑を食した要因のひとつに、温州蜜柑は種がないことから「(子)種なし」の不吉な食物として認識されていたことが挙げられる⁽³⁾。「明治期に温州蜜柑栽培が本格化し、各地に温州蜜柑産地が形成された」という説明は、温州蜜柑は不吉という認識があり、生産地・消費地では紀州蜜柑を選択する社会・経済構造であったが、明治期以降には紀州蜜柑よりも温州蜜柑を選択する社会・経済構造へ転換したということになる。この転換がなされた背景として、豊田紘子ほかでは明治政府による外貨獲得の奨励を背景に「温州蜜柑＝不吉」認識がなく、無核で食べやすいと高評価を得た海外市場への温州蜜柑輸出が活発化し、各生産地が温州蜜柑を導入したことを明らかにし、また温州蜜柑の海外輸出において輸送時の腐敗問題に直面し、輸送距離が比較的短距離である国内市場に販路が移行するなかで、国内における温州蜜柑流通量の増大が消費地における「温州蜜柑＝不吉」認識を払拭した可能性が予察されている⁽⁴⁾。さらに熊本県河内を事例に李婦人橘(温州蜜柑の別称)の導入による産地の変容を検討した松村祝男は、明治前半期の李婦人橘の導入により「柑橘名産地」が「柑橘産地」へと変容し、地域経済が「近代化」したことを指摘している⁽⁵⁾。これらの指摘を援用すると、紀州蜜柑から温州蜜柑への転換は生産地と消費地における「近代化」と捉えられ、温州蜜柑の生産地形成過程を明らかにすることは日本における近代化の検討につながる。

ところで、温州蜜柑産地を含む果樹産地においては、果樹園地に栽植する苗木を自ら生産する場合と、苗木産地から購入する場合とがある。明治期に新たに栽培が開始される果樹・野菜は、導入時には試験場が中心となって各地に種苗を配布するが、日本在来品種の温州蜜柑に関しては試験場を経由せ

ず苗木産地が温州蜜柑苗を販売していた。和歌山県有田における温州蜜柑導入は、江戸後期に大暴風雨によって崩れた柑橘園地を再建するために大量の蜜柑苗木が必要になり、需要の高まりにより価格が高騰した紀州蜜柑苗ではなく、低価格の温州蜜柑苗を間に合わせのものとして購入し栽植したことが契機であったと伝わる⁶⁾。ここで注目されるのは江戸後期に苗木生産地には栽植可能な温州蜜柑苗が大量に用意されており、産地の需要に応じる体制が整っていたことである。温州蜜柑産地形成には温州蜜柑苗を生産する苗木産地の存在が不可欠であることから、本稿においては「池田苗」を生産する苗木産地の兵庫県川邊郡稲野村（現在の兵庫県伊丹市）を事例地域とし、苗木産地が近代日本の温州蜜柑産地形成にいかに関連しているのかを明らかにすることを目的とする。

本稿ではまずⅡ章において日本の苗木産地について植木生産地の地域類型をもとに整理する。Ⅲ章では明治期の柑橘産地を概観し、明治期に作成された『日本の蜜柑』や『柑橘栽培書』などの農書を用いて明治期の温州蜜柑苗流通を検討する。Ⅳ章では温州蜜柑産地形成に関連のある「池田苗」の産地である兵庫県川邊郡稲野村における明治から大正期の苗木生産を概観し、明治期から苗木を生産している楽苗園における接ぎ木技術の継承や経営方法から、苗木業および苗木産地の地域的特性を検討する。Ⅴ章では温州蜜柑産地形成に苗木産地がいかに関連しているのかを考察する。

Ⅱ 植木生産地域の分類からみた苗木産地

『日本の植木生産地域』では日本の植木生産地域を図1のように類型化している。まず、産地形成の時期により、江戸藩政期以前に起源をさかのぼることのできる伝統的植木生産地域と、1960年代以降の緑化ブーム期に形成された新興植木生産地域とに二分し、新興植木生産地域は主要生産種目により

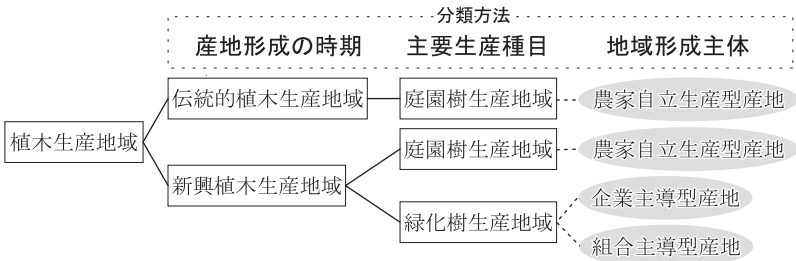


図1 日本の植木生産地域の類型
(澤田(1984)の類型をもとに作成)

庭園樹生産地域と緑化樹生産地域とに二分される。産地形成時期と主要生産種目によって分類された生産地域は、さらに地域形成主体によって農家自立生産型、企業主導型、組合主導型の3類型に分けられる。伝統的植木生産地域と一部の新興植木生産地域においては、生産技術の継承や販路開拓・拡大は各生産者によって個別に行われ、行政や農協などの指導や関与が小さいという特徴があり、これを農家自立生産型産地として類型化している。一方、新興植木生産地域の大多数は1960年代以降の植木需要の急上昇にともなって新たに形成されたため、生産技術の習得や販路の開拓は農協や生産組合、緑化企業などに依存せざるを得ず、生産者だけでなく企業や組合との連携のなかで形成された産地をそれぞれ企業主導型産地、組合主導型産地として特徴を指摘している。

伝統的植木生産地域としては安行（現在の埼玉県川口市）、稲沢（同・愛知県稲沢市）、細河（同・大阪府池田市）、山本（同・兵庫県宝塚市）、田主丸（同・福岡県久留米市）があり（図2）、江戸時代においては山林苗木、果樹苗木、桑苗木などの苗木類や、生け花用の切枝等が生産の中心であった⁽⁷⁾。明治期になると商業的農林業の隆盛のために、さらに果樹苗木や山林苗木などの苗木需要が増加し、交通網・通信網の整備を背景に、伝統的植木

生産地域の生産者は苗木・植木のカタログを作成して全国へ送付した。図3は園芸雑誌に掲載された広告で、苗木生産者の住所、園名、氏名と取扱い品目が記載されている。図の左部に「営業案内無代進呈」とあり営業案内はカタログのことをさす。このような広告からカタログ請求ができ、請求があった場合にはカタログを送付し、それをもとに通信販売を実施したため、伝統的植木生産地域の市場圏は地場市場だけでなく全国へ展開された⁽⁸⁾。

伝統的植木生産地域に

おける販路拡大は行政や組合主導の動きではなく生産者により独自に展開されたものである。果樹や蔬菜など他の農業生産地においては流通や販売は仲買などの専門的な流通業者が行うため、伝統的植木生産地域が苗木生産だけでなく販売、流通をも手掛ける点は他の生産地域と比して特異的であり、商業的性格が強いと評価できる。伝統的植木生産地域においては、江戸時代から昭和戦前期にかけて苗木が主要種目で、このような商業的性格の強い苗木産地が温州蜜柑苗木を生産していた。

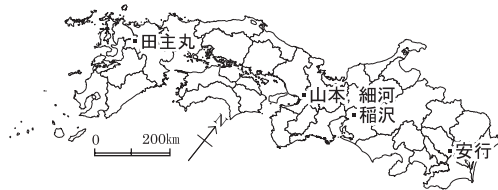


図2 日本の伝統的植木生産地域
(澤田(1984)の類型をもとに作成)

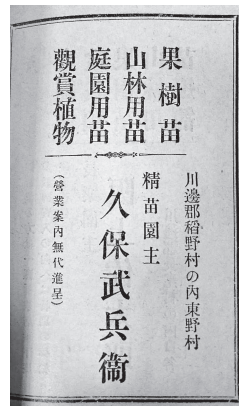


図3 苗木カタログ無料配布の広告
(兵庫県川邊郡農会編1912『撰津川邊郡の園芸』から転載)

Ⅲ 明治期の柑橘産地の分布と温州蜜柑苗流通

まず、明治期の柑橘産地の分布を示した図4から、東海、近畿、九州地方に柑橘産地が分布し、とくに近畿地方においては多数の産地が分布していることがわかる。また、現在柑橘産地として知られている広島県や愛媛県においては産地が少なく、これは広島県や愛媛県の柑橘産地域は明治後期から大正期にかけて急成長した新興産地であり⁹⁾、明治20～30年代においては産地化がさほど進展していなかったためと考えられる。

つぎに、1901（明治34）年に刊行された『柑橘栽培書』をもとに、各柑橘産地域の温州蜜柑苗入手方法と流通網を検討する。図5をみると、東海、近畿、中国地方の柑橘産地域においては苗木を購入して栽植する場合が多く、四国、九州地方では柑橘生産者が接ぎ木した苗木を用いている。

また、温州蜜柑苗の販路を示した図6からは、柑橘苗木産地は兵庫県川邊郡、愛知県中島郡、福岡県浮羽郡に位置し、それぞれ伝統的植木生産地域の

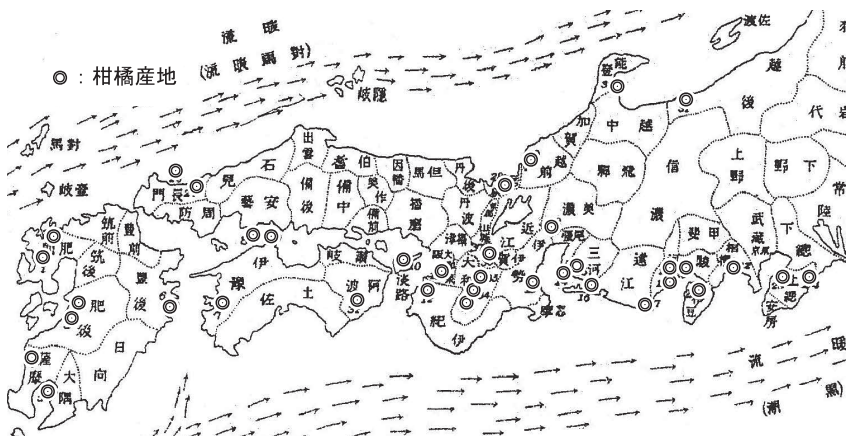


図4 明治中期の柑橘産地

(安倍熊之輔 1904『日本の蜜柑』より作成)

細河・山本、稲沢、田主丸とほぼ一致することが読み取れる。静岡県と大阪府には川邊郡産と中島郡産の苗木両方の苗木が流通し、大阪府の各柑橘産地においては「多くは兵庫県川邊郡稲野村字新田中野及び愛知県より一年生或

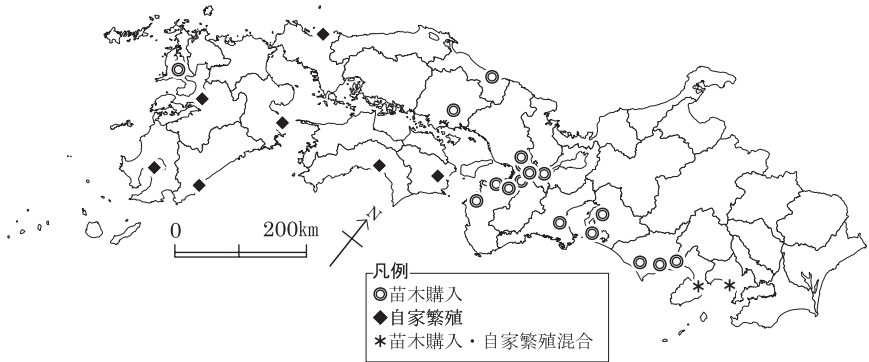


図5 各柑橘産地の苗木入手方法
(北神貞 1910『最新柑橘栽培書』より作成)

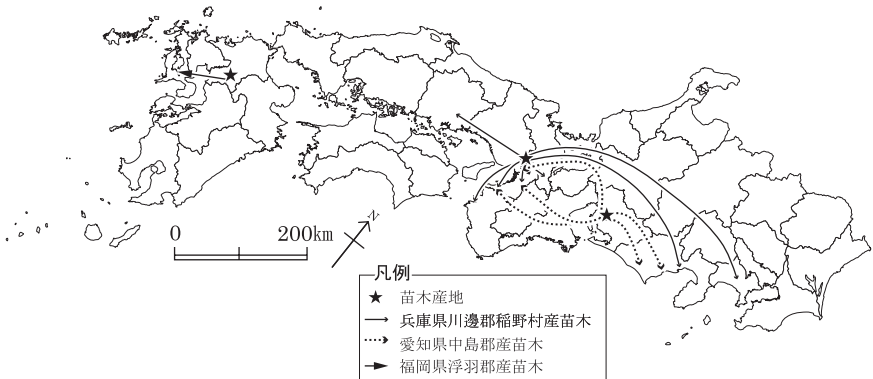


図6 柑橘苗木の販路（明治期）
(北神貞 1910『最新柑橘栽培書』をもとに作成)

は二年生苗木を購入し（泉北部）」⁽¹⁰⁾のように両産地の苗木が使用されている場合が多く見受けられる。また川邊郡産の苗木を用いていたが「近来尾張地方より苗木を購入するもの多し（東河内郡）」⁽¹¹⁾というように、川邊郡産の苗木に加えて新たに中島郡産の苗木を用いるようになった柑橘産地があった。

兵庫県川邊郡産、愛知県中島郡産、福岡県浮羽郡産の苗木は明治期にはそれぞれ池田苗、尾州苗、田主丸苗と称されていた。園芸家・安倍熊之輔は1904（明治37）年に刊行した『日本の蜜柑』の「繁殖の方法」において、温州蜜柑苗について次のように記述している。

資料1 池田苗とは、大阪府の豊能郡と兵庫県の川邊郡に跨つて栽培せられて居る総名称である。（中略）昔は紀州でも、泉州でも専ら池田苗を植付けてたのであるが、近来は頻りに尾州苗を植付けて居る。⁽¹²⁾

資料2 尾州苗の起源は（中略）中島郡井堀の近藤重兵衛、服部代吉、堀の内の吉田清左衛門、吉田平左衛門、八木重左衛門、服部善左衛門等苗木の栽培をなし（中略）、明治三年始て紀州、遠州に蜜柑苗の輸出を始めた。（中略）当初泉州では、尾州苗は池田苗の名を冠らせぬと購入者が少ない有様であつたのが、今では池田苗も尾州苗の名を冠らせて販売すると云ふ反対の結果を生じて居る。⁽¹³⁾

資料3 尾州は蜜柑苗の産出が盛で（中略）、全国中で之れに次ぐのは田主丸で素より尾州苗には及ばないが、其産額は著明な（ママ）池田の蜜柑苗に殆んど一倍して居る。田主丸の蜜柑苗と云ふのは筑後の浮羽郡田主丸町、付近水分村植木、船越村秋成に産出する（中略）。我邦で蜜柑苗を最も多く産出する処は池田で、昔から専ら紀泉西国の需用に応じたので、汎く世間に知られて居る。田主丸苗は其産額の多い割合に未だ世間に知られて居らぬ。特

に其栽培の方法は、尾州よりも池田よりも巧である。⁽¹⁴⁾

資料1、2、3から、明治中期の温州蜜柑苗として池田苗（大阪府豊能郡・兵庫県川邊郡産）、尾州苗（愛知県中島郡産）、田主丸苗（福岡県浮羽郡田主丸町・水分村・船越村産）があり、池田苗は柑橘産地域に古くから用いられ産出額が多く全国的に著名な苗木である。一方、明治中期には池田苗ではなく尾州苗を導入する柑橘産地域が増加し、さらに尾州苗に次ぐ苗木として田主丸苗が登場している。また資料2に「尾州苗は池田苗の名を冠らせぬと購入者が少ない有様」とあるように、柑橘産地域では栽植する苗木の生産地を意識しており、それは「尾州苗に結実した蜜柑は、形状肥大、外皮平滑」⁽¹⁵⁾といったように苗

木の生産地によって蜜柑果実の出来が左右されるという認識があったためであると考えられる。とくに温州蜜柑に関しては海外市場への輸出が意識されるなかで無核であることが重視され⁽¹⁶⁾、『日本の蜜柑』においては、府県ごとの温州蜜柑の有核歩合を提示し（図7）、愛知県産温州蜜柑の有核歩合の低さは尾州苗を用いているためだとして尾州苗に注目している⁽¹⁷⁾。

府県名	産出額	有核歩合	府県名	産出額	有核歩合
鹿兒島	六	六〇〇〇〇	宮崎	三三	三〇
大分	一四	八五七〇一	山口	二	一五〇〇〇
島根	二	一五〇〇〇	山梨	二	一五〇〇〇
高知	三	三二七二七	千葉	三三	一〇二〇七〇
福岡	一一	二一八八	徳島	三七	七七八九一
長崎	一一	一〇一六三	奈良	四二	七一六六六
愛媛	六一	一〇一六三	熊本	四二	七一六六六
静岡	六三	七一一一	岐阜	一三	二一五二八
大阪	一一六	六五一一	和歌山	一五	六五二
愛知	二二	〇	廣島	二二	一四五四

図7 『日本の蜜柑』に掲載された明治期の温州蜜柑の有核の歩合（安倍熊之輔1904『日本の蜜柑』76頁から転載）

Ⅳ 兵庫県川邊郡稲野村における苗木生産と地域的特性

(1) 明治～大正期の兵庫県川邊郡における苗木生産

池田苗の生産地である大阪府豊能郡・兵庫県川邊郡において、江戸期以前に川邊郡長尾村山本（現在の宝塚市山本）と豊能郡細川村木部（同・池田市細河）にそれぞれ木接太夫（砧木太夫）という嫁接法の熟練者がおり、その接ぎ木技術が周辺地域に伝わり苗木・植木生産が広まったと伝えられている⁽¹⁸⁾。川邊郡稲野村においては江戸時代には山城、大和、河内が主な販路であったが、明治期以降には紀州、山陽地方、四国地方、九州地方に販路が拡大した⁽¹⁹⁾。また、明治期の稲野村における苗木業の展開を検討した久野洋は、稲野村東野の園芸家である久保武兵衛家の苗木注文書や取引関係書類から久保家が全国各地の農学校や農事試験場などと広範なネットワークを形成していたことを指摘している⁽²⁰⁾。

兵庫県川邊郡稲野村は伊丹町の北西の台地に位置し（図8）、付近には瑞ヶ池や昆陽池など多くのため池がある。1909（明治42）年には稲野村東野の東部とその南部に果樹畑が分布しており、果実の収穫だけでなく果樹苗木生産が行われていた可能性がある。また東野と新田中野には「その他の樹木畑」の植生記号が確認でき、苗木生産を示すものと考えられる。

新田中野における1899（明治32）年から1901（明治34）年の苗木生産について（表1）、主要生産種目は柑橘、梨、苹果、桃、桑、桐で、栽植反別が最大の種目は柑橘で、1本あたりの価格は他の種目と比較して高い。また1912（大正元）年においても川邊郡全体として柑橘苗木の産額が最も多く、一ヶ年に190万本の一年生苗木を販売しており、さらに国内だけでなくアメリカ・テキサス州に温州蜜柑苗を輸出していることが報告されている⁽²¹⁾。図9は1912年前後に撮影された川邊郡の柑橘苗栽培場で、平坦な土地に密集した状態で柑橘苗木が大量に栽培されていることがわかる。

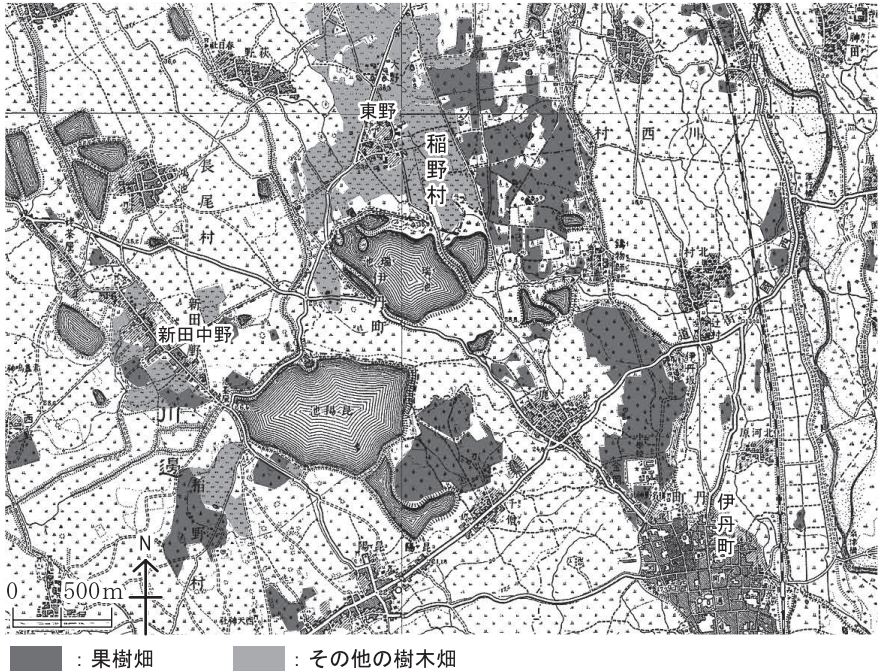


図8 明治期の兵庫県川邊郡の果樹園・その他の樹木畑の分布
(明治42年測量、明治44年発行 2万分1「伊丹」「甲山」を基図に作成)

表1 川邊郡稲野村新田中野における苗木生産—1899~1901年—

主要 種生 目産	1899			1900			1901		
	反別	樹数	1本 あたり 価格	反別	樹数	1本 あたり 価格	反別	樹数	1本 あたり 価格
柑橘	40.0	400,000	0.040	40.0	400,000	0.040	40.0	450,000	0.060
梨	2.0	240,000	0.020	2.0	240,000	0.020	2.5	300,000	0.020
苹果	0.5	60,000	0.020	0.7	80,400	0.021	1.5	180,000	0.020
桃	4.5	500,000	0.012	5.0	600,000	0.014	5.0	600,000	0.014
桑	0.0	0	0.000	0.0	0	0.000	4.5	8,000,000	0.001
桐	0.0	0	0.000	0.0	0	0.000	2.5	1,000,000	0.001

(北神貢(1903)『柑橘栽培書』裳華房, 222 - 224頁より作成)

注) 反別の単位は町、1本あたり価格の単位は円である。



柑 橘 苗 栽 培 場

図9 兵庫県川邊郡の柑橘苗栽培場
(兵庫県川邊郡農会編1912『摂津川邊郡の園芸』から転載)

川邊郡の苗木生産は稲野村を中心に展開され、柑橘類を中心とした果樹が主要な生産品目であり、国内だけでなく海外へも販路が展開されていた。

(2) 楽苗園・久保弥三雄氏にみる苗木生産者の先見性

久保弥三雄氏は明治期から川邊郡稲野村において苗木業を営む楽苗園に生まれ、現在も接ぎ木を行っている。弥三雄氏は接ぎ木技術の習得において、農学的な知識以上に、幼少期に見よう見まねで接ぎ木をはじめ、失敗を重ねる中で自分なりの接ぎ木方法を見つけ出した経験が大きな糧となったという。父親や家族から直接的な接ぎ木の指導は受けなかったものの、苗木生産をする地域に生まれ、常に苗木に囲まれた環境で育ち、家には接ぎ木に必要な道具がそろっていたために自然と接ぎ木をはじめた。接ぎ木において、台木のハラとセを見極め、穂木と台木の師部を完全に接着させるために表面に凹凸

ができないようよく研磨されたナイフで一気に切れ込みをいれるといった技術はこれまでの経験で身についた（図10）。接ぎ木においては台木と穂木との親和性が重要で、接ぎが成功してものちに枯れる場合があり、また苗木が栽植された環境によってはうまく生育しない場合がある。そのため様々な台木と穂木の組み合わせを常に模索しているという。たとえば、温州蜜柑をはじめとした柑橘類の台木には枳殻や柚子が用いられる場合が多いが、近年の気温上昇でこれまでの接ぎ木では暑さで枯れてしまうため山椒を台木に用いるなど、売った苗木が生産地で長く生育するように新品種開発を続けている。また仕事としての義務感だけではなく、「これは接げるか」といった実験的な楽しみもあるという。

久保家には1933（昭和8）年の果樹苗木のカatalogが所蔵されており、カatalogには梨18種、葡萄12種、桃18種、柑橘17種など、合計で244種の苗木が掲載されている（図11）。それぞれの苗木はさらに一等、二等といった等級や一年生、二年生などの栽植年数によって区分され、100本単位の代金とそれぞれの苗木の特性が記載されていることから、久保家において苗木は多



図10 接ぎ木（切接）の手順
（久保弥三雄氏の実演と聞き取りをもとに作成）

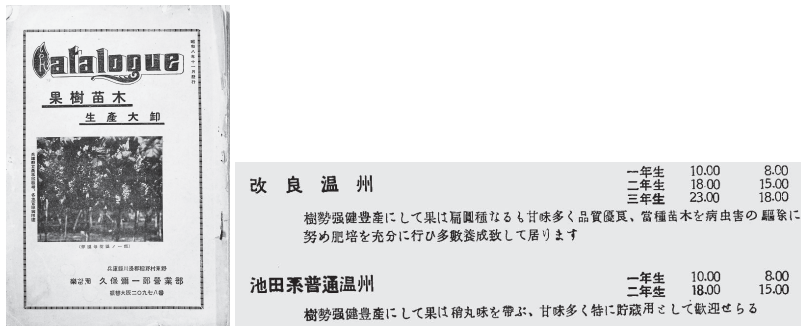


図11 久保家の果樹苗木カタログ—1933年—
(久保弥三雄氏提供)

品種大量生産が行われていることがわかる。現在の久保家の苗木畑からは、現在も多品種大量生産が行われていることが確認できる（図12、13、14、15）。

弥三雄氏の苗木生産からは、接ぎ木技術が独自に継承されており、またカタログを用いた販路拡大が行われるという伝統的植木生産地域の農家自立生産や商業的性格が強いという特徴が見受けられる。また新品種開発を活発に行い、その新品種を含め多品種を大量生産するという経営方法は、接ぎ木後に販売に至るまで少なくとも1年にかかるため、苗木の販売先である産地の環境や需要の変化を予測し、常に変化に対応できる体制を整えておく苗木業の危機管理のひとつであると考えられる。このような経営方法は久保家だけでなく、苗木・植木産地において広く共有されており、たとえば周辺の苗木・植木産地である山本や細河においても久保家のような多品種大量生産の土地利用が見受けられる。苗木産地における多品種大量生産と断続的な新品種開発は、それ自体は苗木業経営における危機管理のひとつであるが、他の農業地域と比して高い先見性を有しているという地域的特性として指摘できる。



図 14 久保家の苗木畑—2018年8月—
(兵庫県伊丹市で撮影)



図 15 久保家の苗木畑—2018年8月—
(兵庫県伊丹市で撮影)

Ⅳ おわりに

本稿では温州蜜柑産地の形成について苗木産地の動向に注目し検討してきた。Ⅱ章では伝統的植木生産地域の苗木生産について概観し、苗木産地の商業的性格の強さを指摘した。また柑橘苗木がどのように流通しているかを検討し、池田苗、尾州苗、田主丸苗が温州蜜柑苗として用いられており、温州蜜柑産地は果実の出来をよくするために苗木の生産地に注意を払っていることが明らかになった。Ⅲ章では温州蜜柑産地形成に関連の深い池田苗の生産地である兵庫県川邊郡の苗木生産について検討した。川邊郡では明治期以降、

柑橘を中心とした果樹苗木が生産され、これらの苗木は日本国内だけでなく海外においても販売されていた。楽苗園・久保弥三雄氏の苗木生産技術の習得や、多品種大量生産、新品種開発といった苗木生産は苗木業における危機管理によるもので、苗木産地においては商業的性格が強く、先見性を有するといった地域的特性が見出された。

柑橘産地が温州蜜柑苗を導入する契機は和歌山県有田の大暴風雨による柑橘園地の崩壊と再建のように偶発的に発生した場合が考えられるが、その際に温州蜜柑苗が栽植されたのは苗木産地において温州蜜柑苗が生産されていたためである。苗木産地においては経営上の危機管理のため、また苗木生産者自身が実験的な楽しみとして新たな接ぎ木を試行するために、多品種大量生産と新品種の生産がなされており、温州蜜柑苗の生産はそういった苗木産地の一品種として生産された可能性がある。温州蜜柑産地形成において、産地に温州蜜柑苗を供給したのは苗木産地の先見性の高さによるもので、このような地域的性格が明治期の温州蜜柑産地形成に寄与していると考えられる。

〈付記〉

本稿を作成するにあたり、伊丹市立博物館のみなさまには整理作業中の資料の閲覧・撮影を快く許可していただき、また伊丹市の苗木業の展開について有益なご教示をいただきました。楽苗園・久保弥三雄様には貴重なお話を聞かせていただき、接ぎ木の実演と苗木畑の案内をしていただきました。また伊丹市農業政策課の熊田啓太様には聞き取り調査に同席いただき、久保家のご家族の皆様には飲み物を準備していただくなど大変お世話になりました。以上記して感謝申し上げます。

注および文献

- (1) 各地の柑橘史において明治期以降に温州蜜柑栽培が開始されたことが指摘さ

れている。①図書撰奨会編『津久見柑橘史』津久見柑橘史刊行会、1943。②塚口勇作編『静岡県柑橘史』静岡県柑橘販売農業協同組合連合会、1959。③広島県信用農業協同組合連合会編・発行『広島県 農業発達史』1962。

(2) ① 内山幸久「日本における主要果樹生産の展開」地理空間6-2、2013、83-94頁。②岩間 泉「果樹作産地形成過程における豪農の行動規範—岡山県の事例—」農林業問題研究78、1985、48-51頁。

(3) 花木宏直「近世後期～明治前期における柑橘品種と需要—和歌山市街及び周辺地域を事例に一」地理空間3-2、2010、96-112頁。

(4) 豊田紘子・小口千明・伊藤大生・山下史雅・鈴木修斗・佐藤壮太・川添 航・鈴木秀弥・野場隆汰「明治期日本における温州蜜柑の普及と在来小蜜柑からの嗜好変化」歴史地理学野外研究18、2018、21-84頁。

(5) 松村祝男『果樹作と庶民と地域の近代化—河内みかん発達史—』龍溪書舎、2007、39-57頁。

(6) 和歌山県立文書館所蔵、中尾家文書(な-0003) 129 [(表紙欠) 総論]

(7) 澤田裕之「日本における植木生産の分布と地域類型」緑化研究会編『日本の植木生産地域』古近書院、1984、5-30頁。

(8) 前掲(7) 14頁。

(9) 神田市場協会・神田市場史刊行会編『神田市場史』上巻、神田市場協会・神田市場史刊行会、1968、982頁。

(10) 北神 貢『柑橘栽培書』裳華房、1903、120頁。

(11) 前掲(10) 139頁。

(12) 安倍熊之輔『日本の蜜柑』1904、73-74頁。

(13) 前掲(12) 80-81頁。

(14) 前掲(12) 82-83頁。

(15) 前掲(12) 74頁。

(16) 前掲(4) 51-58頁。明治期に開催された内国勸業博覧会における温州蜜柑の高評価点として、種子の有無(無核であること)が重視されるようになったことが指摘されている。

(17) 前掲(12) 75-77頁。

(18) 前掲(10) 221頁。

(19) 前掲(10) 221頁。

(20) 久野 洋「明治期における苗木業の展開と園芸農家久保武兵衛—農商務技師との関わりを中心に—」地域研究いたみ43、2014、64-88頁。

(21) 兵庫県川邊郡農会『摂津川邊郡の園芸』1912、2-3頁。